

ヨコのライスカレーを御馳走しました。部室の机の下のバケツにその生々しい残骸をみるのがあったら大騒動になっていた…… おいしくいただく彼女の横顔をみながら神妙な顔で喰べている悪タレたち。(大へん失礼)多感な学生時代でした。

私の研究(註3)ですが、植木先生の要点を押えた指導によりどうにか期間内に仕上りました。発表当日私の発表に、我が意を得たりといったニコヤカな顔、未だに忘れることはできません。並いる学科代表教授からも賞讃を得ることができました。学校長清水虎雄先生(註4)、物理学の田代教授、電気の児島教授、生物の林教授等々、鋭い質問を浴せられる方々、そうした席上であっても、他研究生に対しても常に暖かく、そして激励することを忘れられなかったものです。

多くの人々、各界の方々が今も植木先生を惜しむ所以であろうと存じます。本来ならば先生の業績をあげ、追憶するのが本旨かも知れません。あえて机下にふれ、人間味あふる一端を紹介して先生への讃辞といたします。

なお、学友の消息は石浦先生から御教示いただきました。厚くお礼申し上げます。

註1 1.3.5期…は全日3ヶ月間登室研究生、2.4.6期…は毎週木曜登室1ヶ年生。

註2 金岡又左エ門氏のお嬢さん、植木先生への特別依頼聴講生、現金岡幸二氏令夫人。

註3 研究論文、「両棲類の雌雄性の差異」付「イモリの奇形について」は、文部省科学研究室刊、「研友会誌」№3に掲載

註4 学校長、清水さんの父君は、有名な憲法学者、虎雄さんは名前と違ってその頃流行し始めた、NHK のど自慢に出場、サンサンデー モニング……と歌って多鐘合格された人、勅任官校長(その頃この制度がまだありました?)として威厳ある半面、大へん大衆的でありました。

故坂下栄作先生を偲ぶ

1. 故坂下栄作先生の本学会と生物研究に対する執念

本多啓七

坂下先生は84才の生涯を終えるまで、この富山県生物学会の発展を祈ってこれたことを思い出されてなりません。敗戦間もなくこの学会の事務局を引き受けて下さいました。また、学究的な立場で絶えず研究を続けられ、毎年の研究発表会には必ずその成果を発表されわれわれに対し無言の示唆を与えて下さいました。何時も変らぬ若々しい研究意欲に燃えておられる学究態度に深く敬服されるものがありました。先生のこれらの思い出を次に述べて生前を偲びたいと思います。

A. 先生が引き受けられた当学会の事務局は二回あった。

①学会復活の際の事務局長——アジア太平洋戦争中は約5ヶ年近く学会の活動を停止していたが、敗戦と同時に会員一同が集ってこれからの日本復興は理科教育の振興が基盤であるとの気運が盛り上がり、早急に当学会の活動を開始することを決定した。この会員の中心には進野先生を、また事務局を富山県中学校の総元締である富山中学校に置き、生物教師の坂下先生をその世話役をお願いした。敗戦の物資欠乏の折にかかわらず事務局長として多忙の事務をこなして下さいました事に対し深く感謝申し上げます。

②第二回目の事務局長——これは植木忠夫先生が当学会の第三代会長であった際で、坂下先生が退職後、富山女子短大附属高校に再度生物教師となられた際、三年間事務局長をしていただきました。この途中の事務局は富山中部高校、富山大学、県理科教育センター、上市中学校などと移動したあげくのもので、如何に事務局の仕事が多忙で繁雑であったかが痛感されます。

B. 学会の研究熱の必要を常に示された先生。

①温泉生物の大家——先生は戦前、九州の温泉都市別府の中学校生物教師として温泉生物の研究に専念され、帰県後は県下の温泉生物の研究をされ度々発表も行われ大いに期待しました。

②富山県生物分類表の発刊——当時としては画期的な印刷物でありました。

③歯に関する大家——先生は退職後、富山女子短大附属高校の生物教師として活躍され、特に生物クラブでは歯の研究の指導に当られ、日本学生科学賞で中央に出品されたこともありました。先生はこれを契機として歯の研究を本格的に行われ、昭和61年頃まで続けられました。この成果は当学会はもちろん中央の歯の専門学会に於いても高く評価される程の魅力的でしかも斬新な研究内容でありました。これも先生の研究に対する執念のあらわれと思われれます。

以上のように先生は当学会では忘れることの出来ない重要な人材でありました。しかも常に当学会の発展を祈って下さいました。ここに先生の功績をたたえ、心からご冥福をお祈りします。

2 別府での思い出

坂下 彰

旧制富山高校の博物学教室で助手の仕事をしていた栄作は結婚して私が生れると、まもなく、大分県別府市にある別府中学(旧制)に赴任した。博物学教室の植木教授のお世話によってである。昭和10年のことだった。北陸と気候風土の全く異なる九州の地は、若い父にとって研究対象物の豊富さもあって、またとない好適の地であった。生徒たちは、栄作の言葉やなまりがおかしくてアダナ「越中」をつけた。しかし文検で教員資格をとったせいもあってか、教え方が緻密で熱心であったので一目置いていた。父は家庭のことは全くといっていいほど顧みなかった。引っ込み思案の母はまるっきり知り合いもない、言葉も通じにくい異郷の地に来て私という幼児を抱えて途方にくれてさみしがっていた。一生を別府で過ごしたかった父が昭和17年には富山県へ帰らざるを得なかったのもそのせいであった。でも別府では私はときどき野外へ連れていってもらった。田圃のなかのぬかるみでザリガニが鮮やかな赤いさみを蓮の葉の陰からかいま見せたり、落葉の積もった溪流をそと覗くと魚の尻尾がゆらゆらとかいま見えたり、枯れ枝が交錯した腐葉土の間からぶっくりとした白いキノコが顔を覗かせていたり、それらを胸を弾ませながら窺った思い出がいまも脳裏をよぎる。父は休日にはいつも野外へ調査にでかけた。湧出する温泉のかず2000か所をかぞえ、そこに生活する細菌類、藍藻類、貝類、昆虫類、魚類、手当たりしだいに調べた。やがて誰かの口ききがあったのだろうNHK熊本中央放送局より「温泉とそのなかで生活している生物」と題して本人の喋りによる放送が行われた。昭和14年3月29日6時25分～6時55分のことだった。放送原稿の抜粋——昆虫類には、ミヅカマキリ、アメンボ、コオヒムシ、ガムシ、ゲンゴロウ、カゲロウ、温泉蠅等の幼虫も52～53度迄の温泉に住んでいますが温泉に特有のものでなく冷水にも居るものです。しかし扇山山麓の溪谷から出るpH3、8という強酸性の硫黄明ばん泉にも生活している事はちょっと注目を引きます。次は魚ですが由布院の金鱗湖やこれと交通している温かい小川、光永地獄、亀川等にはコイ、フナ、メダカ、ドゼウ、オヒカワ、チチブなどは私達が入ったら気持が良いだろうと思われるような40度内外の温泉中に生活しています。昨年の夏光永地獄で釣りをやってみましたところ水表面で48度もあるところからフナが釣れました。こんな高温の所に生活しているのは川と連続しているから段々温度に慣れてきたためでしょう。最後に一言述べます。熱帯の淡水魚を飼育繁殖させたい事です。これらは色彩が鮮美で模様が端麗であり、形が清酒で見るからに快感を与え動的の美と静的の美を兼ね備え求愛の挙動・産卵・育児などにも奇妙な習性があるので鑑賞魚として満点の価値があります。

当時における別府の思い出はつきません。

研究発表

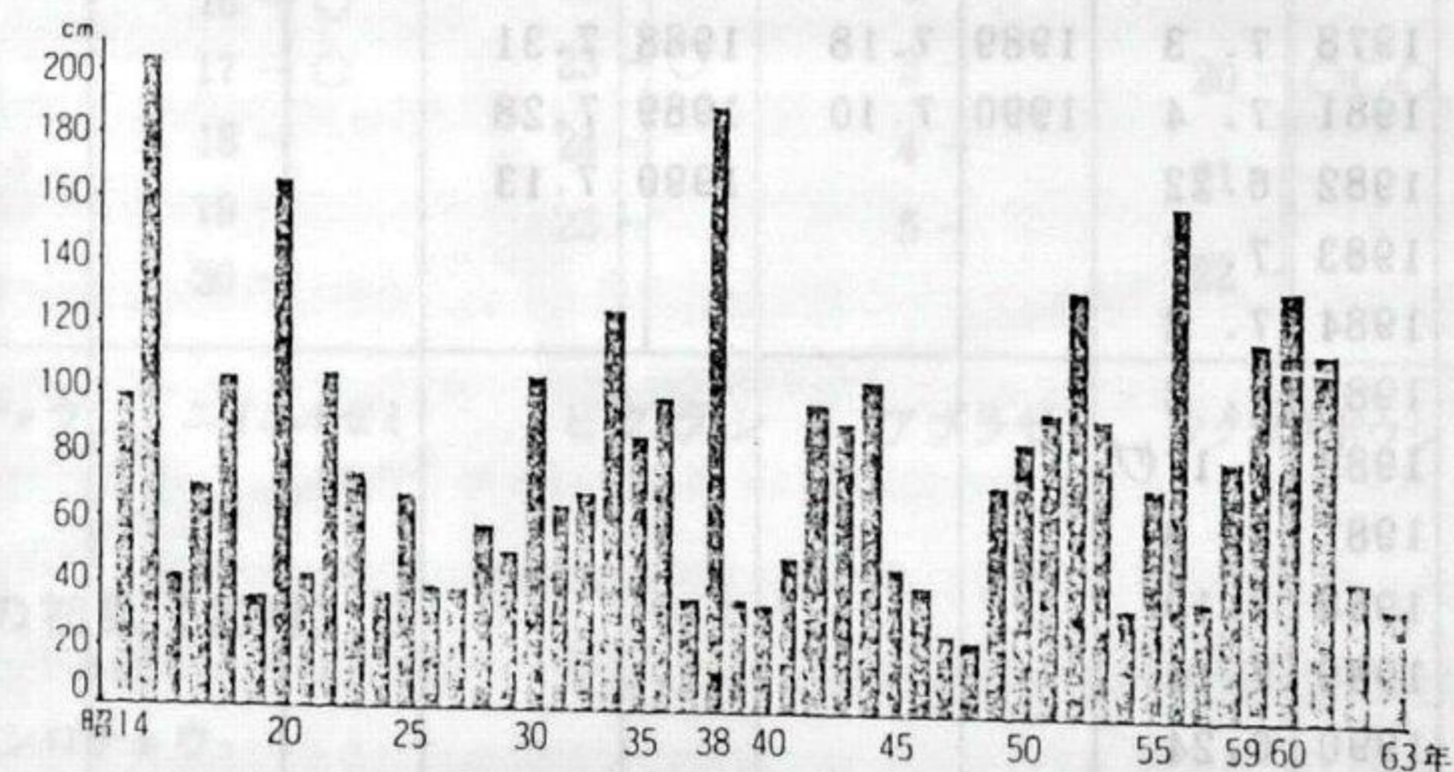
数種昆虫の初見・初鳴日

田中忠次

筆者は折にふれて生物の初見日または初鳴日を記録している。そのうち記録数の多い昆虫6種について記してみたい。

昆虫の出現は気象に関係することが多い。特に春出現するものは冬の気象、出現時の気象に大きく左右される。雪が少なく暖冬といわれながら、冬の終り頃に積雪があり、残雪が長く続いた年や出現時期に寒気が続いたり、雨が続きたりすると出現が遅れる。したがってその年その年の気象と照合しながら出現日に考察を加える必要がある。しかし筆者には気象に関するデータの持ち合わせがなく、そのことにふれることがほとんどできない。ここでは主として観察した年の初見日や初鳴日をあげるにとどめる。ただし筆者の観察に見落としや鳴き声の聞きもらしがあるであろうし、先にあげたように昆虫自体の気象による出現時にずれがあること故、出現日の記録に正確さの欠ける点のあることはいめない。

参考までに考察の一助にもと富山県統計課(1989)の「富山がわかる本」の中にある最深積雪の年別変化の図を掲げることにする。



最深積雪の年別変化(富山がわかる本より)